ふたたび女性研究者の専門について

鈴　木　秀　夫

この前，投稿の御依頼を受けた時，現在の地理学は，魅力ある諸現象のうちきわめて限られた部分しか扱ってこなかったこと，そしてそれは研究の担い手がほとんど男性に限られてきたことによるものであることを論じた。

そのことについて，もう少しくわしく述べてみたい。

魅力ある諸現象のなかで，落ちてしまっていた最大のものの一つが食事である。食べることには人類のエネルギーの大部分が費されているにもかかわらず，われわれはたとえば砂漠のなかで，人は一体何をどう食べているのかということについて具体的な知識をほとんど持っていない。

このことなどは重要であるにもかかわらず知識が組織化されなかったのは，研究の担い手にとって厨房に入ることに抵抗があったためだと考える。あるいはまた，体質的に深入り出来ない対象物であるのかも知れない。

最近1～2の報告もみられるようになったとはいえ，まだこれからのものである。

食物・食事の構造には，日本という範囲のなかでも興味つきない地域差があるに違いない。

衣・食・住のうち，最後のものは，集落地理学として生長し，その面白さの一端を私も最近ようやく理解できるようになったが，衣・食についても，それ以上に重要な学問分野になることを確信して疑わない。そしてそれを築き上げるのは女性研究者にもっともふさわしいことであろう。

主として教育の場で，男性の果してきた役割をひきつぎつつある現在，伝統的な諸分野をまず学ばねばならないことは理解できる。

しかしその上に立って，なお未開拓の分野に分けいっていただきたいと思う。

それまでの軌道からふみ出すということは易しいことではないが，先日来日したウイン大学のボベック先生によれば，今や女性研究者の仕事が質においてもより秀れたものが多くなってきたとのことであり，日本でも遠くない将来にそれを望むことは無理ではないはずである。